国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈論文紹介〉 Zendo Uwano, Three types of accent kernels in Japanese, Lingua Vol. 122, Issue 13, Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems (October 2012), 1415-1440.

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 上野, 善道
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000748

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　　Vol.4 No.2 pp.161−163（October 2013）

〈論文紹介〉

Zendo Uwano
Three types of accent kernels in Japanese

Lingua Vol. 122, Issue 13, Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems
(October 2012), 1415-1440.

上野 善道

本論文は，私自身の音調観・アクセント観に立って進めてきた日本語アクセント研究の成果を海外の研究者に向けてまとめて書いたものである。

私の立場は，世界で広く行なわれている見方，すなわち，H（高）やL（低）などの「段階」を前提とする見方（IPAもこれに基づく）ではなく，音調は「動き」（変動，動態）としてとらえるべきであり，また人間はそのように知覚しているに違いないとする考えである。

その動的な把握とは，音調を時間の流れに添った上昇，下降，変動なし（平進）の動きとしてとらえるもので，表記もそれに合わせて［（上昇），］（下降），無表記（変動なし）とする（記号の外形は問題ではなく，「 や ┐ 等を使っても同じで，［ と ］は入力のしやすさを優先させたもの）。それぞれの「拍」（モーラや音節などの韻律単位の意）の高さ（静的な段階）そのものには言語的な意味はなく，音調をとらえるためには各拍の高さが分かる必要はないと考える。1句で発音された「頭が痛いときは」という例において，すぐに知覚され，かつ意味があるのはア［タマ］ガイタ］イトキ］ワというアとタ，タとマ，マとガ等々の拍間の相対的動きであり，アやマやワの固有の音程（段階）ではない。そこに言語と音楽の違いがあるとする立場である。

初頭部（その前に「拍」を伴わない形）であっても，通常の声立て状態からの変動が可能である。「雨」は普通のはっきりした発音ではそこに上昇があるので［ア］メと表記する。アからメへの下降の前には上昇があるのが当たり前という考えで上昇を省いてア］メと表記することはしない。ア］メで表わされるのは，晴れを期待して朝起きてみたら雨だったときなどに気落ちして独り言をいうときの音調である。そこでは上昇はなく，下降だけがある。上昇と下降は独立で，この「雨」の2種は区別して発音でき，意味も異なる。その違いをこのように表記し分ける。私は，いわゆる（音節）声調言語でさえ，中国語式の静的5段階表示ではなく，動的にとらえるべきではないかと考えている。ちなみに，上昇調（R），下降調（F）でも拍内に固定したとらえ方では静的である。

こうして動的にとらえた音調の型をできるだけ多くの（理論的にはすべての）環境で観察して分析し，アクセント単位に固有の特徴を抽出するのがアクセント解釈である。その特徴の典型が「アクセント核（核，accent kernel）」である。ピッチ言語の核とは，その位置で一定方向の音調変動をもたらす力で，日本語には「下げ核（lowering kernel），昇り核（ascending kernel），上げ核（raising kernel）」の3種類を私は認める。下げ核が最も広く見られるもので，

その次を下げるという働きをもつ。この核の考えのもとは服部四郎に始まるが，それは次に「低」を伴う「高」，すなわちＨ（L）という段階に基づく静的規定であった。これに基礎を置く説が世界に広く流布しているが，私の下げ核はＨやＬという段階とは無縁で，どの高さであれその次を下げるという動的な性格をもつと規定する。これにより何段階もの下降をそのままとらえることが可能となる。昇り核はそこから昇る働きであり，上げ核はその次を上げる働きをする。この観点から諸方言を分類し，その分布を示し，かつ昇り核と上げ核は下げ核からの変化であると見て，その歴史を解明したのがこの論文である。

具体的には次の節立てから成る（3.1.1 などの下位区分は主に具体的な方言例なので省略）。

1 Introduction
　1.1 Stress accent vs. pitch accent　1.2 Tone vs. accent
2 Typology of Japanese pitch accent systems
　2.1 Traditional classification　2.2 A synchronic typology
3 Types of accent kernels in Japanese
　3.1 Lowering kernel　3.2 Ascending kernel　3.3 Raising kernel
4 Distribution of Japanese accent systems
　4.1 Distribution of accent systems　4.2 Distribution of accent kernels
5 Development of the ascending kernel and raising kernel
　5.1 Development of the ascending kernel　5.2 Development of the raising kernel
6 Types of changes in pitch accent in Japanese
　6.1 Progressive shift　6.2 Regressive shift　6.3 Non-sequential changes
7 Accent shift in Korean

主要な点を略述する。1.1 節では，強さアクセント（stress accent）の特徴を 6 つ上げ，とりわけ，アクセント単位ごとに指定されるアクセント核について，その位置は決まっているが音調の変動方向は決まっていない点が，位置と変動方向がともに定まっている高さアクセント（pitch accent）との大きな違いであると見た（単純な物理的強さと高さの違いなどではない）。1.2 節では，アクセント単位ごとではなく，拍（音節）ごとに指定が必要な声調（(syllable) tone）も加えて対比し，その弁別力は声調＞高さアクセント＞強さアクセントの順で，これは方言差の大小にも対応する一方，その音声物理的対応物の複雑さは，強さアクセント＞声調＞高さアクセントだとした。

2 節は，通説となっていた京阪式・東京式などのアクセント分類を批判し，基準を明示して一貫した共時的な分類を提案した。階層的分類にして一目で見えるように心掛けた。これらに加えて，アクセント核の種類など，さらに他の基準も入れると交差分類が生じて特徴ごとの有無の束で分けることになるが，それでは分類の大局を一目瞭然の形で示す効果がなくなるのでこの段階で止め，核については別に論じた。

3 節において，中心となる 3 種のアクセント核をその具体的な方言例とともに扱った。4

節はそれを分布図の形で示した。先人の調査報告を見直し，上げ核の方言として新たに埼玉県久喜・菖蒲方言と伊豆の神津島方言を加えた。

5節では，下げ核から上昇と下降が右（語末寄り）にずれることによって昇り核と上げ核がそれぞれ生じた過程を明らかにした。その変化は，核の担い手が「拍」であって「拍境界」ではないことも示している。音調変化については6節で一般化して述べた。右への移動（progressive shift）が通常であり，その逆の左（語頭寄り）への移動（regressive shift）は稀で，担い手が音声的に「弱（weak）」の場合に見られる特殊なものだとした。これらの連続的（sequential）な変化の他に，第3のタイプとして，非連続的な変化（non-sequential changes）もある。語頭隆起と上昇の直前の陥没がそれで，中央方言の歴史以外にも現代方言のいくつかに生じていることを述べた。

最終節では，同じ考えを朝鮮語にも適用すると，通説とは正反対に，中期朝鮮語のアクセント体系は現代慶尚道方言よりも新しいことになるとして，その変化過程を推論した。

校正段階で次の大きな誤植が生じてしまった。p. 1417

ˈthirteen ˈmen → *ˈthirteen ˈmen* は *ˌthirˈteen ˈmen* → *ˌthirteen ˈmen*。

ˈJapanese ˈpeople → *ˈJapanese ˈpeople* は *ˌJapaˈnese ˈpeople* → *ˌJapanese ˈpeople*。

ˈthirteen and ˈfourteen → *ˈthirteen and ˈfourteen* は *ˌthirˈteen and ˌfourˈteen* → *ˈthirteen and ˈfourteen*。

ˈadult and ˈadult は *ˈadult and aˈdult*。

他に，p. 1420（4）l. 2 ha](:)ga は [ha](:)ga。p. 1423（10）右端 [ko]sumosu は [ko]sumosuga。

上野 善道（うわの・ぜんどう）

国立国語研究所理論・構造研究系客員教授，東京大学名誉教授。

主な著書・論文：『言語学』（共著，東京大学出版会，1993, 2004（第2版）），Japanese dialects: The geographical distribution of Japanese accents（*Language Atlas of the Pacific Area, Part II*, No. 27, Australian Academy of the Humanities in collaboration with the Japan Academy, 1983），「N型アクセントの一般特性」（『現代方言学の課題2 記述的研究篇』，明治書院，1984），「日本語アクセントの再建」（『言語研究』130，2006），「琉球喜界島方言のアクセント――中南部諸方言の名詞――」（『言語研究』142，2012）.

受賞：東京言語研究所言語学懸賞論文1等（東京言語研究所，1975），沖縄文化協会賞 金城朝永賞（沖縄文化協会，2000）.

社会活動：日本言語学会元会長，日本音声学会前会長，日本語学会会長代行.